

赤毛種を後世に伝えたい



赤毛種について解説する住田さん



毎年春に見本田で行われる西部小児童による田植え



秋の稲刈りで、稲の束を横棒に掛ける様子



米作りを指導

毎年秋、旧島松駅通所横の見本
田で、西部小学校の児童が赤毛種
の稲刈りを行っている。刈り取っ
た稲は、束にして横棒に掛けて乾
燥させる。慣れない作業だが、自
分たちで植えた稲が立派に育ち、
満足そうだ。

子どもたちに田植えから稲刈り
までを教えるのは、北広島市水稲
赤毛種保存会会長の住田昇さん。
先祖は和田郁次郎翁と共に入植し
た開拓農家。自身の水田でも赤毛
種を作り、保存に努めている。

北広島ゆかりの赤毛種

明治時代、北広島で中山久蔵翁
が寒地稲作に成功した赤毛種。食
味ランキングで最高位を受賞し全
国に広まった「ゆめぴりか」は、
その子孫に当たる。

北海道米のルーツといわれる赤
毛種だが、栽培が難しいため生産

赤毛種の保存に尽くす

住田 昇さん

すみだ・のぼる
中の沢在住。
開拓農家の4代目。北広島市水稲赤
毛種保存会の会長として、赤毛種の
生産を続けるほか、市内外の小学
校で赤毛種の栽培を指導している。
長年にわたり統計調査員も務め、昨
年10月には、北海道社会貢献賞を受
賞した。

されなくなっていた。成長が早
く、しつかり管理しないと稲刈り
の前に倒れてしまうことや、のぎ
(もみの先端についているひげの
ような部分)が長く、機械で脱穀
できないことが理由だ。

北広島ゆかりの赤毛種を絶やし
たくないという声が上がったのは昭和
58年ころ。広島県から集団移住し
て100年の節目を迎えるに当た
り、見本田を復活させ、保存・栽
培に取り組むことになった。

住田さんが赤毛種を作り始めた
のは平成11年から。「赤毛種は手間
が掛かりますが、続けたことで、
多くの人のつながりができまし
た。中山久蔵翁の故郷である大阪
府・太子町との交流も生まれたん
ですよ」と振り返る。

秋の稲刈りが終われば、すぐに
翌年の準備に取り掛かる。種もみ
を準備し、春先に水に漬けて発芽
させ田植えに備える。植えた後は
定期的に雑草取り。そんな努力が

保存を支えてきた。

子どもたちに伝える

近年、北海道米のおいしさが全
国的に認められている。同時に中
山久蔵翁の功績をもっと多くの人
に知ってほしいと住田さんは願う。
次世代を担う子どもたちに、赤毛
種のことを伝えるため、市内外の
小学校で米作りを指導している。
「子どもたちが学んだ成果を発表
する授業を見学させてもらいまし
た。まるで米博士のように、とて
も詳しく調べていて、うれしかっ
たですね」。

保存会の皆さんが作った赤毛種
は、年に1回市内の小学校の給食
で提供されている。子どもたちは
「久蔵さんが作ったのと同じ米な
んだね」と開拓当時を思いながら
味わうそう。

子どもたちが赤毛種について学
び、郷土の誇りと感じるよう、こ
れからも活動を続けてほしい。

